

海神の国訪問

古事記 上巻

火照命は、海の幸を授かつておいでになりました海幸彦であらせられたので、鰭の広い大きな魚や鰭の狭い小さな魚を御捕りになり、火遠理命は、山の幸を授かつておいでになりました山幸彦であらせられたので、毛の麤い大きな獣や、毛の柔かな小さな獣を御獲りになりました。或時、火遠理命が御兄の火照命に向つて、互に幸を取易へて、其の漁獵の道具を交換して使用つて見ようではありませんかと、三度も懇請なさいましたけれども、初めは火照命は御許諾になりません

でした。然し、たびたび御頼みになりましたので、後纔に御取易へなさいますことゝなりました。

そこで、火遠理命は、海幸彦となつて、魚を御釣りになりましたが、一尾の魚も御釣りになることが出来なかつたのみならず、其の釣鉤までも海に失くしておしまひになりましたのであります。其のうちに、御兄の火照命が、其の釣鉤を返してくれと仰しやつて、「山幸も其の人自身に授かつた幸であり、海幸も其の人自身に授かつた幸である。其れ故、もう御互に自分の幸を元通りに取返すことに致さうではありませんか」と申されました。御弟の火遠理命は、「あなたの釣鉤は、

魚を釣つて見ましたが、一尾も釣れないばかりか、海に失くしてしまひました」と仰しやいましたけれども、御兄火照命は、どうしても返してくれと厳しく御催促になりました。

御弟の火遠理命は、佩いておいでになりました十拳劍を壊して、五百本の鉤を作つて弁償なさいましたけれども御受取りになりませんので、更に千本の鉤を作つて之を弁償なさいましたが、尚ほこれを御受取りになりませんで、是非とも元の鉤を返してくれと御言ひ張りになりました。

そこで、弟命は浜辺に出て泣き悲しんでおいでになりますと、其

処へ塩椎神が出て来て、「如何あそばしましたのですか、何で日の御子は御泣きなさいますのですか」と御尋ね申したので、「わたくしは、御兄様と釣鉤を取易へて、其の鉤を失くしてしまつたのです。御兄様が其の鉤を御催促なさいますので、わたくしは沢山の鉤を作つて之を弁償したけれども、御受取りにならないで、やはり元の鉤を返せと仰つしやるのです。それでわたくしは、泣き悲しんで居るのです」と火遠理命が仰せられました。

其の時、塩椎神は、「わたくしは、貴方様の為めに好い工夫をして上げませう」と云つて、無目勝間の小船を造り、これに火遠理命を御

乗せ申して、御教へ申すには、「わたくしが此の船を押し流しますから、暫くの間乗つておいでなさいまし。やがて好い潮路に出るでありませう。其の潮路に乗つておいでになりますと、魚鱗のやうに造つた宮室があります、其れが綿津見神の宮殿であります。其の宮の御門に御到著になりましたならば、其の傍の井泉の側に繁茂つた香木の樹が有りませうから、其の木の上においでになりますと、きつと其の海神の御女が貴方様を御見付け申して、好いやうに取計らつてくれるであります。」と御教へ申し上げました。

火遠理命は、塩椎神の教への通りに少しおいでになりましたが、ことごとく其の言うた通りでありましたので、やがて其の香木の樹に登つておいでになりました。すると、海神の御女の豊玉姫の侍女が出て来て、美しい碗を持つて水を汲まうとすると、井泉に人影が映つて居るので、上を見ると、立派な壮夫が其処に居るので、大層不審に思ひました。其の時、火遠理命は其の侍女を御覧になつて、「水を飲ましてください」と御頼みになりますと、侍女は、水を汲んで、美しい碗に入れてさし上げました。火遠理命は其の水は御飲みにならないで、御自分の御頸に懸けておいでになりました頸飾の玉をはづして、それを口に含んで、其の美しい碗の中に御吐き入れになりました。と

ころが、其の玉が碗にくつついてしまつて、どうしても取離すことが出来なかつたので、それで玉を附著けたまゝで侍女が之を豊玉毘売命に差上げました。

豊玉毘売命は其の玉を御覧になりました、「若しや門の外に人が居りはせんか」と侍女に御尋ねになりますと、「彼の井泉の傍の香木の樹の上に人がおいでになります。大層御立派な殿方でいらつしやいます。我が君様よりも立まさつて高貴に御見えになる御方でいらつしやいますが、其の御方が、水をくれと仰せられましたので、差上げましたところ、水は御飲みあそばしませんで、此の玉をば吐き入れなさい

ましたのでございます。其れがどうしても離れませんので、入れたまゝ持参いたして差上げましたのでございます」と申しました。そこで、豊玉毘売命は、不思議な事だと思ひ召して、御自身出て御覧になりましたが、なるほど御立派な御方だと御感じになりました、互に目と目と御見交しになりましたが、やがて其の御父に、「門の処に立派な御方がいらつしやいます」と申し上げられました。

そこで、海神は、御自身出て御覧になりました、「あゝ此の御方は、天神の御子にまします日の御子であらせられる」と言つて、直ちに内へ御案内申し上げ、海鱸の皮の敷物を八重に敷き、更に絶の敷物

をも八重に敷いて、其の上に御坐らせ申し上げ、数多の台に積み上げた沢山の御馳走を取揃へて御饗応申し上げて、其の女の豊玉毘売を御妃に差上げました。かくて、火遠理命は三年になるまで其の国に御住りになりました。

さても、火遠理命は、初めの事を御想ひ出しになつて、或日大きな歎息をほつと為さいました。豊玉毘売命は其の歎息を御聞きになつて、其の父に、「今まで三年の間御住りになりましたけれども、いつも歎息など為さいますことが無かつたのに、今夜大きな歎息を為さいましたのは、若しや何かの理由が有るのではございますまいか」と申され

ましたところ、其の父の大神が、早速其の婿君の火遠理命に対つて、「今旦ほど女の申すのを聞きますと、これまで三年もおいでになりましたけれども、いつも歎息など為さいますことが無かつたのに、今夜大きな歎息を為さいましたと申しましたが、若しや何かの理由が御有りになりますのでございますか。して又、一体此地においでになりましたのは、どういふ御事情からでございますか」と御問ひ申しました。そこで、火遠理命は、其の大神に、彼の兄命が失くした釣鉤を御催促になつた事状を、詳しく御物語りになりましたのであります。海神は之を聴いて、やがて海中の大小の魚どもを悉く召集して、「若し

や此の中に釣鉤つりばりを取つた者はないか」と尋ねられました。すると、多くの魚どもが申すのに、「この頃赤海鯉魚たひが喉のどに何か刺ささつて物も食たべることが出来ないと言つて悩なやんで居りますから、屹度きつと彼が取つたのでございませう」と申しました。そこで、其の赤海鯉魚たひの喉のどを探さがつて見ると、果して釣鉤つりばりが有つたので、早速に之を取り出して好く洗きひ清きよめて、之を火遠理命に奉られました。其の時に、其の綿津見大神わたつみのおほかみが火遠理命に御誨おをしへ申し上げられましたのは、「此の釣鉤つりばりを御兄上おんあにうへに御返おかへしになる時に、『此の鉤はりは、淤煩鉤おぼち、須須鉤すすち、貧鉤まちち、宇流鉤うるちよ』とかう呪言となへごとを唱となへて、後手うしろでに御渡おわたしなさい。而して御兄上そが高い田を

御作りになつたならば、あなたは低い田ひくを御作りなさいまし。又御兄上あひだが低い田を御作りになつたならば、あなたは高い田を御作りなさいまし。さうなつたならば、わたくしは水みづを掌つかさどつて居りますから、三年の間に、御兄上は必ず貧乏になつておしまひになりませう。若し又、さうされた事を恨怨うらみに思つて攻せめておいでになりましたならば、此の塩しほ盈珠みつたまを出だして溺おぼらしてしまひ、若し御愁請おあやまりなさいましたならば、此の塩しほ乾珠ひるたまを出だして助たすけておやりになり、如此かうして御兄上を苦しめ懲こらしておやりなさい」と申して、塩しほ盈珠みつたまと塩しほ乾珠ひるたまの二箇ふたつを御授おさづけ申して、やがて和邇魚わにどもを召し集めて、「今、天神あまつかみの御子みこの日の御子みこが上国かみがた

においでにならうとするのであるが、誰が幾日で御送り申して復命をするか」と御尋ねになりました。

すると、和邇どもは、めいめい自分の身体の長さに随つて日限を定めて申しましたが、其の中で一尋の長さの和邇が、「わたくしは一日で御送りして帰つて参りませう」と申しました。そこで、其の一尋和邇に「それでは御前が御送り申し上げよ。海中を渡る時に、少しでも恐ろしい思ひをおさせ申してはならぬぞ」と言ひ渡して、やがて其の和邇の頸に御載せ申して送り出し奉りました。而して、言うた通りに一日の内に御送り申し上げたのであります。其の和邇が帰らうとした

時に、火遠理命は佩いておいでになりました紐小刀を御解きになつて、これを和邇の頸に結び附けて御返しになりました。仍つて其の一尋和邇を、今でも佐比持神と申すのであります。

かくて、火遠理命は、一々海神の御教へ申した通りにして、彼の釣鉤を御返しになりましたが、其の後兄命がだんだん貧しくなつて、一層に荒々しい氣持になられたので、火遠理命を攻めて来られました。ところが、攻めて来ようとせられると塩盈珠を出して溺れさせ、困窮つて助けを求められると塩乾珠を出して助け救ひ、如此して苦しめ懲らしめなさいますと、遂に兄命は頭首を下げ、

ら後は、あなた様の夜昼の守護人となつて御仕へ申し上げませう」と申されました。それで、今に至るまで其の子孫の人々が、火照命の水に溺れられた時の種々の様態をして、代々御仕へ致して居るのであります。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『現代語訳古事記』植木直一郎著